

優れた看護実践：新しい知の創出とわざの精錬

Excellent Nursing Practice: Creating New Knowledge and Refining Skills

日本赤十字看護大学 川 嶋 みどり

近年、高等教育のテンポは急激に進み、看護大学は180を超えようとする勢である。そうした中、本学会は、研究者による研究の質を高める努力の一方、看護学の基盤は実践にあるとして、臨床を足場としている多くの看護師の扉をいち早く開き、文字通り看護実践と教育、研究のコラボレートをめざしてきた。改めて多くの先人諸氏に深甚の敬意を表したい。そこで、本学術集会は、本学会の伝統や諸先輩の思いを継承し発展させる意味と、新時代に向かって看護学研究と看護実践の方向を探る意思として「創（はじめ）を探り未来を拓く」をメインテーマにした。

本講演での「優れた看護実践：新しい知の創出とわざの精錬」は、この60年近くを、看護とともに歩き続けてきた一人の看護師・教師・研究者として、実践をよりどころにした新しい知を創出し後世に引き継ぐ責務を痛感している私の思いから生まれた。看護学研究の成果である数多くの理論やモデルは、学術的な関心及び臨床の看護場面にも取り入れられ、看護実践の質を高める上で一定の貢献を果たして来た。一方、看護実践そのものの歴史はさらに古くから蓄積されている。メインテーマである「創を探り未来を拓く」ためにも、初心の初心にかえて多くの先人の築き上げてきた看護の本質を問い、人々の信頼にこたえることのできる専門職ならではの看護の実践を行うことこそ、いま、求められていると思う。とはいえ、現在、看護を取り巻く諸事情は非常に複雑である。医学の進歩、高度医療技術、患者の高齢化、そして疾病構造の変化などは誰もが認識していることである。では、これに伴う看護の進化の方向は、いったいどこへ向くべきなのだろうか。

そこで今回の講演では、「看護学は実践の学である」との共通理解のもとに、3つのキーワードを挙げた。すなわち「優れた実践」「技の精錬」「新しい知の創出」である。看護の知の創出は、演繹と帰納を行き来しながら研究成果を整理、分析、分類、体系化し、理論化される場合と、長年の経験の蓄積によって生み出される場合があると思う。いずれもそれらの知は、実践の根拠になり、質の高い実践を担保することになる。

1. 優れた看護実践について

実践としての看護は、母親が病める子どもの額を小川の

水で冷やした漠とした過去に遡る。素朴かつ未熟であっても、世話をし慰めを与えるケアの方法は家族から家族へ、世代から世代へと伝えられ、やがて近代の専門的な看護に進化して来た。古くからの言い伝えは多くある。たとえば、12世紀、東ローマ皇帝アレクシオス王1世（1048年～1118年8月15日、東ローマ帝国コムネノス王朝の初代皇帝）の女王アンナ・コムネナが、父の最期を看取った際の記録から、優れた看護の実践を垣間見ることができる。「母皇后は、毎晩皇帝の傍らで夜を明かした。両腕でその体を支え、いくらかでも呼吸が楽であるように身体の位置を変えるのに工夫をこらし、敷布団の具合をあれこれ整え、コップではなく酒杯で水を飲ませた。咽頭ばかりか舌の奥の方も炎症を起こしている父は、そうすれば何とか飲むことができた」。ここには、中世の家族ケア（といっても王宮の内部であるが）の経験知の中の法則性を読み取れる。つまり嚥下障害患者への経口摂取を支援する際、飲ませる水分の1回量と注ぐ角度と体位が非常に重要であるということである。

また、明治の先達大関和は、桜井女学校付属看護婦養成所の一回生であるが、彼女が卒業して初めて受け持った重症腎炎の少女への献身的な看護の記録にも、現代に通じる優れた看護実践を読み取ることができる。患者は、重症腎炎の13歳の少女。「全身蒼白色、浮腫著明、ようやく開眼する程度、胸腹部膨満著しく、音声かすかにして呼吸細数息迫あり。12月15日より付き添い、1月4日まで1滴の排尿なく大便のみ5、6回。牛乳を十分与えよとの医師の指示で、病人が嫌うのを説得し1日600グラムを7、8回に分けて与えた。当初は拒んだ洗拭も、腎機能の概要と皮膚からの排泄の大切さを説明し拒まなくなった。こうして4日の午後3時頃100mlの排尿があり、私の喜びは今なお記憶に残る。その後、1,000、2,000と尿量が増え、1月9日主治医の出勤当日には常人と変わらぬ腹部になり、1月25日には両便ともトイレ歩行可能となって、2月21日に退院になった」とある。

ところで、今なぜ、優れた看護実践なのか。それは、市場原理に支配された医療の在り方のもと、高度医療技術の普及に伴う超過密、高速回転の現場環境で求められる看護実践能力と基礎教育内容との乖離に起因する。就職後僅か

1年に約9%の新人が離退職し、それ以外の看護師の疲労やバーンアウト現象。このような状況の隘路として優れた看護実践は1つの方策になり得る。つまり、優れた看護実践を新人時代に体験し、「やったー！できたー！」という達成感を成就することにより、人々の信頼にこたえ得る専門職としての道を主体的に開くのである。

ナイチンゲールは、優れた看護師は「患者にどのようなことを感じているか言わせないで読み取れ、患者の顔に現れるあらゆる変化についての意味を理解できること。そして、これらのことについて自分ほどよく理解している者はないと確信がもてるまで、これらについて研究すべきである」と述べた。また、ヘンダーソンは、「すぐれた看護師は他者の皮膚の内側に入っていく」と表現し、そのためには「無限の知識、蓄積された技能、忍耐力、寛容さ、感受性、そして努力し続けることのできる能力」をあげ、「完全で成熟したすぐれた看護師は、患者に同情を寄せ、かつ敏感に反応する能力はもちろん、看護の技術的な力を十分に身につけているだけではなく、自分の情緒的な反応と技術的な対応とを、自分の患者の特殊なニーズや自分のおかれた状況に適した独自のやり方で活用し、またその機会をもつ」と述べている。

私は、ごく普通に現場で働く看護師らの優れた看護実践をイメージしてこの言葉を用いる。学生であれ新人であれ、目を見張るような優れた実践を行うことの例を、いくつも挙げるができるからである。そこで、「たとえそれが1回限りの実践であっても、後日『あのときのあの事例、あの経験と同じ』という内容をもち、そこから引き出される真理は年月を経て有用である」のが優れた看護実践であると考えている。つまり、優れた実践は、受け手にとって有用なことは勿論、普遍的な新たな知見に通じる仮説が産出できるレベルの実践をいう。これにより新たな実践知を生み出すことができるのである。経験が本来の意味を持つためには、ただ経験をすればよいというものではない。過去から今日まで、優れた経験の蓄積は豊富であっても、その多くが、意識化されないままに見過ごされてきた。言葉化されていない経験を知にしていくということが極めて重要である。

そこで優れた経験知をどのように意識化していくかについて、ある師長が、夜勤の新人に対して、「今夜あたり危ないわよ」と予測した場面から見ることにしよう。ここで、今夜あたり急変する可能性というのは、きちんとその理由が言語化されれば技術化に通じるのだが、この場面では、何故かを抜きに「今夜あたり危ない」とだけ新人に警告した。「だからちゃんと観察しなさいよ」と言う思いを込めて述べたのであろう。この師長の「今夜あたり危ない」という直観は、長年の経験から生まれた優れたカンの

レベルではある。だが、「こんな状態の場合は危ない」と、言葉によって伝えることが未だできないレベルである。

このように、身体感覚として覚えているその個人の技を、武谷三男の技術論から解説すると、まさに、師長の「技能」すなわち、主観的法則性の意識的適用といえる。これまで多くの看護師らは、その場その場での経験を通して自らわざを体得していった歴史がある。しかし、言語化をしてこなかったために、個人の主観的なわざのレベルにとどまっていた。こうした個人的な主観的なわざを、客観的な知識にして初めてそれは技術となり教育可能となる。すなわち、実践における客観的法則性の意識的適用である。換言すれば、技術とは行為の形や手順ではなく、「行為を可能にする原理」である。

2. わざの精錬

しかし、教室で原理を教えて事足りるわけではない。実践できるレベルにするには、学んだ原理を反復トレーニングして個人の身についた主観的なわざ、すなわち技能レベルにして行く必要がある。だが、実現するには種々の困難も多くある。現在の臨床実習体制上の問題もあるが、技術教育自体の問題もあるだろう。制約の多い臨床現場と実習指導体制並びに教員の技術能力から見て、状況に応じて原理を活かし変化させる機会が極めて少ないと言ってもよいだろう。そのまま卒業した新人たちは、応用力がきかない、自信がもてず、患者にとって安心を左右する状況が生まれることは必至である。

なぜいま、「わざ」を重視するのかといえば、道具や機械、機械システムの進歩により、人間の身体ツールの価値を低めた感があるからである。看護教育の近代化により、見よう見まねの徒弟式訓練から脱皮したのはよいとして、反復習熟する方法を軽視してきたのではないだろうか。ある1つの方法を徹底的に練習し、その方法がすっかり身体に染みついてしまうと、それを使えないときにどうするかを考えて応用力が働く場合が多い。現在の教育では、それとは逆のことが起こってしまっているように思う。加えて、手のわざを忘れた看護師らが、現実に患者やその家族に何をもたらしたか、そして看護師たちのアイデンティティにも影響を及ぼしているのではないかと。そうした反省点から「わざ」を重視しようと言いたい。

わざの習熟は、手足と頭をフルに使い、量的にその実践を増やしていかなければ身につかないが、その方法の1つは、先達の優れたわざを見る方法がある。「あんなふうになりたい」という憧れや願望とともに、その優れたわざを見ながらコツをつかみ、目標達成に有効な法則性を主観的にまず体験するのである。今1つの方法は、客観的な知識として学んだこと（原理）を、反復実践して主観的な

レベルにまで高め技能化していくのである。

反復練習に際しては、過去の実践によって得た身体の記憶と照らし、評価し、比較するという判断が働く。こうして、一定の緊張のもとに訓練することによりわざは熟達するのである。

基礎教育においては、行為を可能にする原理を知識レベルから使えるレベルにする必要がある。高度の知識を学ぶことに価値をおいて来たことは、高等教育の成果であるが、反面、知識の身体知化を重視してこなかったことによる弊害をもたらしたことも認識すべきであり、なんとしても現在の基礎教育で改めなければならない。すなわちわざを磨くことの言語化（技能習得の技術化）が技術教育の大きな課題である。教室で単に教師のデモンストレーションの見学やVTRをみるだけでは「わざ」は身につかない。演習に際しては、患者像のイメージができ、場面を想像できるようなリアルな事例をできるだけ多くつくり、その患者の必要とする技術の組み合わせを学生たちに考えさせ、優先順位を決め方法を選択し、実際に行って相互評価をし課題を達成する。これからの基礎教育での実践課題である。

わざの習得の段階を武谷技術論的に整理すると、認識の3段階論、すなわち、現象論レベル（形の模倣）実体論レベル（型の習得）そしてわざの真髄にアプローチする本質論レベルがある。

生田（2008）は形から型に移行するさまを、「世界への潜入」という言葉を用いて説明しているが、これを新人の立場で考えると、職場のルールやマナー、人間関係、業務量、先輩や同僚の手技、機械・器具、担当患者の病期・症状、社会的背景、そういったものをひっくるめた「世界」と言えよう。そういった複雑な状況とのコミットメントを成立させ、模倣によって体得したわざ（形）を客観視し、知的プロセスが介在した型のレベルに深化させる。人間の

尊厳、患者中心、安全性、安楽性という看護の基本を根底にしなが、現象、実体、本質へとアプローチしていくわけである。（図）

臨床に身を置いて受け持ち患者のケアをするということは、その患者を取り巻く周辺環境を始め、関連する変数を丸ごと体験しながら型を取得していく。専門的なわざの習得にさいして、形（模倣）から型にしていくことの重要性を理解しなければならない。型の取得とは、対象が変わっても状況が変わっても、目ざすアウトカムを得られるというレベル、つまり、ハビトゥスを習得することである。そこで重要なのが反復訓練であり、経験知を言語化することである。

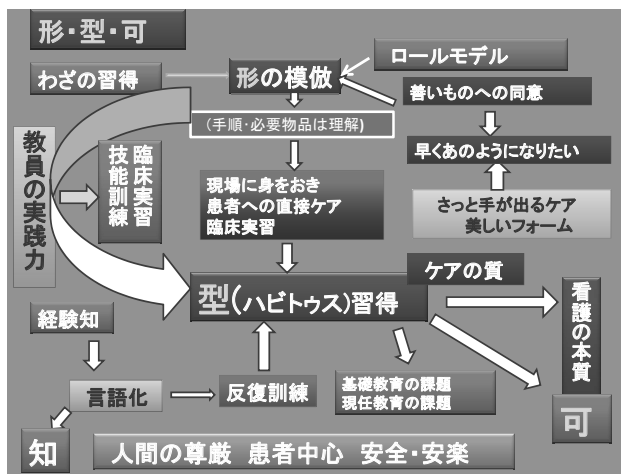
したがって、新人の技術力とか実践力の低下が問題視されているが、看護教員の看護実践力こそ、磨きを高めなければいけないのではないだろうか。看護のロールモデルとなり、学生に教える以上、まず教員こそ身を粉にしてこの実践力を高める研鑽をし、臨床実習における技能訓練のあり方を、看護教育の基本にして研究していかねばいけないと思う。

3. 新しい知の創出

そして最終的に「可」すなわち本質に辿りつくためには、理論学習はもとより、学内演習や実習を通して自己の看護観を身につける必要がある。看護技術学の基礎となる看護技術論は、対象と看護実践者との関係の論理構造を把握することで、客観的な論理を主観的な感覚の上でつかむわけだが、創造的な感覚を基礎に、的確な構想を満たすためには、常にそこに勘が働くと思う。つまり、ひらめきやアイデア、仮説である。

その勘を鋭くする訓練の場はゼミである。ゼミに参加しプレゼンテーションし、ディスカッションする過程で学問の論理を、あるいは感覚をつかむのである。ここでの自分なりの努力と判断を基礎に、チームワークのとれた討論を土台にしながら、「そういう事象はそのような捉え方をするのか」「そういう考え方があったのか」「私はそうは思わない」「でも著者はなんと言っているのだろうか」と文献や著書の抄読を通して、或いは参加者との討論を通じて相互に切磋琢磨しながら勘が鋭く発展していくのである。

ところで、新しい知を創出するには演繹的な研究の方法もあるが、正しい認識は実践によって媒介されるという前提のもとに、経験から新しい知への創出の過程について考えて見よう。まず、知の創出につながる実践は、成功と失敗を繰り返しながら行われることに留意したい。医療や看護のように生命の安全に直結する領域では失敗は許されることが強調された結果、根本的に失敗を認めない風潮を生んだ。このことを、新たな知の創出にフォーカスする



図

と、極めて不幸であるとさえ言える。すなわち失敗事例の中には限りなく研究をするのにふさわしい仮説がたくさん潜んでいるからである。再び失敗を起こさないよう、実践を精練することにより、より高い実践の道を開くことが可能となることを共有しておきたい。

そこで、茂野香おる会員の協力を得て、本学会雑誌の最新10年の掲載論文から新しい知の創出につながる経験知（非成功事例）を探ってみた。ヒット件数112件の中、確かに経験知になりそうな事例は23件。その中に非成功事例が7例あった。詳細は略すが、子どもに対して医療者のペースで処置を遂行する関わりが子どもの心理的混乱行動になったケース、また、重要他者と関われない患者への看護師個々の支援が、かえって退行性をみた例、その他、母子分離過程で看護師個人の母子関係を当てはめようとした例など、1つひとつ吟味しながら、そこにどのような普遍化できる経験知が潜んでいるかを明らかにすれば、新たな研究課題や実践課題が見えて来る。これを看護界全体が共有することにより、さらに実践レベルの向上につながることはいうまでもない。

経験から新しい知を生み出す方策として、web版看護実践事例集積センターの構築までの一連のワーキングについて述べてみよう。この目的の1つは、長年にわたって埋もれて来た看護実践事例を収集・発掘し、一定の枠組みにそって分類整理をすることにより、わが国の看護実践の構造を明らかにすることである。第2に、個々の事例から経験知を抽出し、その経験に潜む客観的法則性を抽出してカテゴリ化するとともに、個々の法則性を仮説にしたエビデンス研究の基礎にしようというものである。これらを整理し、追試を重ねることにより実践事例（経験）から新しい知を生み出すのではないかと考えた。

2002年6月から2009年7月まで、この作業に従事した登録メンバー33名、殆どは臨床経験10年以上のエキスパートナースである。検討会は隔月の日曜日を1日つぶしてこれまで40回に上り、のべ965人が参加した。対象の23誌（学会誌8、看護系雑誌15）に掲載された事例を個票に記載、1事例を数名の看護師らが2回にわたって検討し現在655個票の検討を済ませた。個票作成に約2年半を費やしたが、検討のプロセス自体が1つの研究であると位置づけている。現在、事例提出者と出版社の許可を得て完成個票にし、web上に掲載し始めたところであるが、閲覧のシステム、評価システムをどうするかなどが今後の課題であ

る。さらに、これらの事例を精練し抽象化するために三次チェックを行っている。これが完成すれば、日本の看護師による看護実践から生まれた新しい知を創出できるのではないだろうか。

おわりに

さて、本学術集会の主要な話題の1つにアカデミック・ナース・プラクティクスがある。高等教育の推進と普及は看護の社会的地位の向上にとって喜ばしいが、一方、教育と臨床との間の溝を深める結果を招いた。この溝を埋めるために、30年にわたって実践教育と研究の統合を成し遂げられたペンシルベニア大学での歩みを、この後、エバンズ博士が語って下さることだろう。これに関連して、私は、現行の看護技術教育を見直し、先にも述べた看護教員の実践力の精練を提起したい。学生たちの模倣に耐えるロールモデルとなるためにも、看護系教員の看護実践力の精練を抜きにはできないと思うからである。また、看護教育方法の重要な1つである臨床実習の環境の整備と臨床看護レベルの向上に関しても重要な関心を向けなければいけない。高度医療技術の進歩に連動した看護技術、すなわち保助看法でいう「診療の補助」に関する領域での信頼に依る技術の精練の必要は当然である一方、看護独自の技術の価値の共有と技の精練、すなわち「療養上の世話」における本来の看護独自の技術への価値づけとわざの精練を強調したい。看護師の身体ツールを用い、患者にとっては一番安心で安全で安楽なわざを提供するために、実践・教育・研究面で統合していかなければならないと思う。

看護の道を歩き続けて約60年。自戒をこめて述べておきたいことは、看護という仕事の特性は身分という概念とはなじまないということである。職位的な上下を抜きの切磋琢磨こそ、看護学の発展に必要なことである。研究に際しても、共同課題の遂行の一方で、自己の課題を常に持ち続けることが必要である。絶えず自己研鑽を重ね能力を開発しなければ、たちまち老朽化して研究者ではなくなってしまふ。どんなに年を重ねても、いつまでも若々しく瑞々しい感性を持ちながら研究を続けたいものである。研究能力は、研究に取り組む過程で磨かれるからである。また、研究者も社会人である。看護学の研究者であるためには、普通の人間らしい感覚は、その基礎となることを忘れまい。